

【原 著】

今，岡山の学校教育は
中学校現場で起きていること，そして改善に向けて

岩堂 秀明

The Current Status of Education in Okayama
What Happning in the Junior High Schools,and Counter Measures.

Hideaki IWADOU

2013

岡山大学教師教育開発センター紀要 第3号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.3, March 2013

原 著

今, 岡山の学校教育は

中学校現場で起きていること, そして改善に向けて

岩堂 秀明^{*1}

文部科学省の調査(児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸課題に関する調査 H24)によると, 岡山県内の小・中学校の暴力行為, 不登校の出現率が全国比較では大変高く, 学力・学習状況調査でも国語, 数学ともに通過率が低いことが報告され, 憂慮される事態にある。その原因は複雑多岐に渡っており, 教育委員会や学校現場は解決に向け総力をあげて取り組んでいるが, 大変困難な状況が見られる。県下の教育関係者すべては当事者意識と責任をもってかけがえのない一人ひとりの子どもたちに焦点を当てた本来の教育を再生することが急務である。

私は, 平成 23 年 3 月に中学校長を最後に定年退職し, 現在は教育現場を離れているが, 現役時代(幼・小・中学校・特別支援学校)を自己反省する意味も含め, 中学校を中心としてその現状と改善に向けた方策についてまとめてみた。

キーワード: 改善, 岡山

※1 岩堂 秀明(元岡山県中学校長会会長 前岡山市立京山中学校長)

I. 学校の抱える問題とその改善

1 学習指導について

①学力に関わる気になる実態

(1) 授業改善

文部科学省や岡山県教育庁の校内暴力行為への対応や加害児童生徒に対する学校の措置の状況等を見ると, 個別の学習支援や意欲を持つ活動が大変重要であることが分かる。授業が分からない, ついていけないこと等が起因して, 様々な問題行動に発展しているとも言える。また, 生徒指導上の問題に追われ慢性的な多忙化と教師の精神的余裕のなさから, 授業改善や個々の生徒の学力に応じたきめ細かな指導に手が回りにくいという構図が見られる。

(2) 学力の二極化

岡山市立 A 中学校の学校評価や定期テストの度数分布表から分析すると, 成績の上位群・下位群の二極化が見られる。これは全県的な傾向でもあり, 特に落ち着いた学校や学年はその特徴が顕著である。また, 成績の下位群生徒は, 学習よりも学校生活を楽しみたいという意識が強くなる傾向がある。その傾向が学年全体に蔓延すると学校は落ち着いた無くなる。私が勤務した中学校でも, 学校が荒れた

とき多くの生徒の意識として, 学習が出来ないことは恥ずかしいことではなく, KY(空気が読めないこと)の方が恥ずかしく, 授業よりもみんなと楽しく生活を送る方が大切であるとする生徒が多かった。

(3) 学習離れ

小学校では低学年ほど教師が絶対的な存在であり教師の意図する授業の楽しさが学校生活の楽しさにつながる比率が高い。しかし, 小学校時代から少しずつ授業についていけなくなり, 授業離れ・学習離れが進行している事実がある。

(4) 授業

授業中の生徒の前向きな発表を取り入れなかったり, 得手不得, 興味や関心を見失った指導であったりするなど個に対応しない・できない授業場面もある。岡山市立 A 中学校の学校評価項目の「授業中, 班での活動や先生の質問などで自分の考えを述べることができる。」や「先生方は, 学習意欲の向上を目指し, 情熱をもって工夫した授業を行っている。」の項目では 10 ~ 20 分の生徒が否定的に答え, 岡山市調査「学力の向上(岡山型一貫教育の推進の項)」では「授業がわかりやすく楽しい」と答えた生徒は 81.6 分, となっており, 課題が残る結果となっている。その原

因として、教科書を終わらせるのに精一杯で各教科や領域の授業時数に余裕がないこと、教師の指導力や資質の問題、教師数が絶対的に不足していること、さらに多岐に渡る生徒指導上の問題への対応からくる教師の精神的余裕のなさなどがあげられる。

(5) 家庭学習

各学校では授業の復習のため宿題等で補完しているが、課題の出し方・事後処理は、教師ごとであり調整はほとんど行われていない。また、予習も含めた宿題の在り方が校内で十分共通理解できているとは言えない。

子どもたちの学力や学習に向かう姿勢は、家庭の在り方も大きく影響している。文科省の学力・学習状況調査では小学校・中学校とも家庭学習時間が全国平均と比較しても短いことがあげられている。逆に、平日の情報メディアに費やす時間が全国と比較して若干多い結果が出ている。

②改善のために

小学校低学年ではほとんどの児童が授業についているが、学年が上がるにつれて少しずつ、遅れる児童が増加してくる。小学校段階から一斉授業を補完するための一人ひとりの学力の状況に対応した様々な組織的支援（学校をあげて授業改善に取り組む、学級担任任せにしない、保護者と連携する、ボランティアの活用を図る等）が必要である。

また、校内研修等で各教師が「授業が分かることが学校生活に適応する全ての基本」とであるという問題意識をもち、現在までに行った授業改善に向けての取り組みを反省した授業改善を行わなければならない。

(1) 足に合わせる靴づくり

各校の教育目標は、文科省→県教委→地教委の方針を基に作成している。県や市でベクトルを合わせる重要性や学習指導要領等の指導の基準は必要だが、それと関連させ具体化させた各学校の主体的で子どもたちの実態にあった教育内容や方針がより必要である。各学校にある学校経営計画書（ほとんどの学校のHPに掲載されている。）は、丁寧な学校評価の実施から子どもの実態を基本にしたものでなくてはならない。靴に足を合わせるのではなく、足に靴を合わせる教育こそ基本である。教育目標が飾りになるのではなく、生きたものでなくてはならない。

学校では、授業や学力に関する子どもたちの意識の実態や保護者の願いを把握するため、学校評価を定期的に行い、成果と課題を明らかにしながら、き

めの細かな教育実践を行っている。また、学期ごとの小さなPDCAや、単元ごとの反省から学習指導に関する具体的方策を実施して成果を上げている教師や学校もある。

(2) 少人数指導と習熟度別学習の活用

様々な状況にある子どもたちへの指導・支援は、個々の生徒に対応する指導が原則であり、しなやかで柔軟であらねばならない。学習離れや学力向上に対する施策が早い段階から必要である。そのために学校では習熟度別の学習や少人数指導の学習を取り入れたり、放課後の補習的な学習等を取り入れたりしている。B中学校の学校評価を見ると、授業中の質問の多さや自分の考えを述べる授業形態が浸透しつつあり、教師の指導に対する肯定的な回答が多くなる傾向がある。また、少人数指導は効果を上げており、生徒の満足度が大変高い。習熟度別の指導は、扱いによっては劣等感等を植え付けたり生徒間の人間関係に影響したりする場合もあり、とくに配慮を要する。習熟度別授業に参加する意味が分かり、本人や保護者が納得し、主体的に参加できれば成果が上がる。この取組は教科担任教師の余裕の多少によって、授業が組めることから、さらなる教師数の余裕、もしくは加配教員が必要である。

(3) 家庭学習の具体的指導

毎日、家庭でこつこつと学習する習慣をつけるためには、学校や保護者が学校の大切さや学力の重要性を折に触れて子どもに話すことが大切である。

岡山市立のB中学校では学校評価から学力を分析した結果の方策として、家庭学習に意欲的に取り組むために長期間にわたる学習計画の立て方・学習目標の設定の仕方など、家庭学習の取り組み方や学び方をよりきめ細かに具体的に指導している例もあり、成果が上がっている。

また、学年間、教科間での宿題の在り方についての研修、さらに課題の量、提出の仕方、事後処理の共通理解と調整が必要である。

2 学校・教員の多忙について

①多忙の実態

(1) 余裕のない授業時数の実態

小・中学校では教師が受け持つ授業時数が多く大変多忙である。一日5～6時間の授業のうち、授業のない空き時間が1～2時間程度である。授業のない空き時間と部活動が終了した放課後の時間で、翌日の授業準備・教材研究、クラス全員の生活ノート・

連絡帳への書き込み、日々のテスト採点、校内分掌・教育委員会への提出書類の作成、学級での問題があれば保護者との懇談、さらに異常と思われる時間と労力が必要な保護者対応等の仕事をこなしている。校外に持ち出せない個人情報や機密文書等が多く、夜遅くまで残っての仕事となる。そのような残業は、校長が命ずるのではなく自主的な残業である。中学校では部活動が終了してから一服する間もなく日によっては生徒指導上の問題に関わることも多い。教師によっては、教材研究や採点等は家に持ち帰ることも多い。常に疲れており、ストレスから授業や指導に集中できない教師も多い。

(2) 校内の様々な会議

校内では、月1回の職員会議、週1回の学年会議、生徒指導委員会などの係や分掌の会議（複数の係・分掌を担当していることが多い）、さらに生徒指導上の緊急の連絡会や会議が入るなど、放課後、会議に費やす時間が大変多い。

(3) 多くのエネルギーを費やす保護者対応

詳細な確認や問い合わせだけでなく、学校や教師を告発する保護者が存在するため、学校では保護者への連絡や確認等を細かく丁寧に行っている。例えば、生徒間のトラブルは大小に関わらず上司、保護者に連絡する。生徒間や教師と子どもの関係で解決したとしても、結果的に保護者が納得したか否かで解決することになるからである。また、学校行事など好ましいことであっても新聞に写真や名前が出される場合は、プライバシーの問題から、保護者の許可等を必ず取らなければならない。

また、保護者との関係が壊れ、問題が長期に渡る場合も多く、担当教師はもちろん、学校全体も疲弊する。教師の気分が晴れないまま教壇に立つ場合もしばしばである。

②改善のために

(1) 教育課程の見直し

学校評価を丁寧に実施・分析し、学校行事を精選し、思い切ったシンプルな教育課程を作成することが必要である。例えば総合的な学習の発表会や合唱コンクールを別に開催するのではなく、合わせて文化祭での発表としたり、定期考査の教科数を見直したりすることで少しの余裕時間を生み出すことも必要である。

(2) 会議の持ち方の見直し

校内の様々な会議は長く多忙化に拍車をかけている。会議の精選と会議の持ち方について時間短縮を

図る試みが必要である。

ア 係からの連絡事項であるのか、協議して様々な意見をもらいたい事項であるのか、決定してほしい事項なのか等、提案の仕方の見直しをする。

イ 提案の際、どうしようかという提案ではなく、担当者から具体的に原案を出すことを原則とする。

ウ 職員会議等の多くを長期休業中に実施する。

エ 校内分掌を見直し、教職員は一人一役とするなどして、一つの議題を常に全員で協議するのではなく、責任者を中心に小さな会議等を行い全体の会議数を減少させる。

これらの取り組みから時間を生み出すことは、生徒とふれ合う時間が増大することにつながり、休み時間や放課後、授業時間も含め、より生徒ときめ細かく接していくことが出来ることになる。学校評価から行事や会議、教育課程全般の計画を見直し工夫している学校の事例も多く見られる。

(3) 特に熱心で配慮を要する保護者への対応

学校に対する非難や告発的な言動を教師や学校の都合で単純に「モンスター」とであると決めつけてしまう対応も見られる。その場合には最初から保護者との関係が対立的になることが多い。保護者の貴重な発言であると捉え、丁寧に保護者の立場に立つことはもちろん、子どもの教育課題解決のための対話をするのが第一歩である。もちろん、学校だけでは収拾がつかなくなることが予測される場合には早期から専門機関等への相談が必要である。

(4) 大学生、地域ボランティアの活用

多くの学校ではボランティアとして大学生・大学院生を受け入れている。私の勤務した岡山市立の中学校では毎年、近隣の大学や大学院から40～50名のボランティア学生を受け入れ、大きな効果を上げることができた。教諭の授業にTTとして参加し、きめ細かな指導（通常学級だけでなく特別支援教育では特に効果的であった。）をしたり、放課後の課外授業で個別に指導をしたり、部活動に参加したり、大学生にとっても大変有意義な主体的かつ実践的な研修が行われている。また、様々な話を現職の先生から聞いたり、生徒から学んだりしている。これらは、教師として赴任したときスムーズに学校に入ることが出来ることにつながる。これらを一層重視して実践することが大切である。大学から遠い学校でも工夫次第では取り組むことができる。

また、学区内には元教員やIT等の専門的知識を持つ

ておりボランティアをしても良いと考えている方も大勢存在している。ボランティア募集をして待つのではなく、直接訪問して直接お願いするなど人材の確保が望まれる。岡山市では学校支援ボランティアの制度がありそれに登録して参加をいただいた。

(5) 地域と学校教育の協働・連携からの見直し

地域が子育てや教育をするための組織（青少年育成協議会、交通安全対策協議会、スポーツ少年団、町内会行事、・・・）があるが、それらの事務の一部を学校が担当している実態がある。そのための会議要項の作成や、土・日曜日の地域の様々な行事への参加依頼が多くあり、本務に影響する場合も見られる。連携の在り方を再検討する必要がある。岡山市の地域協働学校や文科省のコミュニティスクールは地域と協働した教育の在り方を実践しているが、学校のすべきこと、学校でしかできないこと、家庭がすべきこと、家庭でしかできないこと等の整理をする取組でもある。この取組のねらいを十分理解した上で取組が必要である。学校課題をこの取組によって解決するという理念や動機付けが確立されている学校園にとっては大変有意義な地域協働学校である。

3 教師の研修と情熱再生

①不適応を起こす教師の実態

(1) 教育の理想に燃え日々努力していたが、学校が荒れるなどしてこれまでにない大きな指導の壁に当たり、指導力に限界を感じ、自分の気持ちを整理できなかつたり乗り越えられなかつたり、早朝から夜遅くまでの仕事や休日も部活動等で出勤し多忙と疲れからいわゆる燃え尽き症候群となってしまう場合がある。また、自分の仕事の量・軽重をコントロールできなかつたり仕事の段取りを付けられなかつたりするなど、努力しても成果が出ず周囲に認められないことから挫折してしまう場合がある。

(2) 多様化している保護者と話が十分かみ合わなかつたり、できにくかつたりする教師、学級で子どもたちを十分掌握できなかつたり、教科指導中、教室が常にざわつき規律が保たれないため授業が成立しにくかつたりする教師等が存在する。落ち着いた学校や教室では指導力を発揮するが、少し枠から外れた子どもへの対応がうまくできない教師が存在する。

(3) 採用試験に合格し希望に燃えて赴任したが、理想とのギャップに悩んだり学校に十分適応できなかつたりして長期の休職に追い込まれたり退職したりする場合が多々ある。

②改善のために

(1) 転勤は最大の研修と言われるが、1校あたり5年から7年程度の適度の期間で転勤し様々な学校や学校種を経験することは、教員としての幅を広げる。また、子どもたちに発達課題があるように教師の年齢・経験年数に応じた校内分掌、困難な経験や責任、教科や領域の専門職としての研修等を各教師が主体的に行うことが大切である。そういう視点から学年主任や管理職前の50歳前後の教員の存在は重要である。言い換えれば、それらの教員を校長は指導し育てることが必要である。

(2) 同僚性の醸成

短期的に保護者との問題が生じ多くのエネルギーを費やすとき、学級や学校の秩序が乱れいわゆる学級崩壊的な事象が起きているとき等、平素から様々な取組や問題に対して一枚岩になる空気が職員室にあれば個の教師の困難も乗り越えられるものである。困難な場面等に直面したとき個々の教師の努力は不可欠であるが、同僚の中に相談相手がいること、具体的場面の経験者や学年主任・管理職の支援があること、さらに養護教諭や臨床心理士のカウンセリング等もできるような校内体制にしておくことが大切である。養護教諭の役割は大変大きい。

(3) 様々な会への参加

校内のレクリエーション大会や勤務時間外の個人的な懇親会等も効果があるものである。物理的・精神的余裕のない場合や個人の考えから最近では参加しない場合も見られるが、できるだけ参加することから、様々な人間関係の樹立もできる。

(4) 各校独自の指導方法の継続性の不足

どこの学校でも過去に順風満帆のときや、大変な状況のときなど波があるものである。しかし、過去に大きな問題を克服した校内の蓄積が活かされてなく、同様の問題が数年ごとに繰り返して起きている。人事異動の周期が短く、10年も経過するとほとんどが入れ替わっている。各学校の問題・課題の特徴を考慮した、継続的で絶え間ない教育方針・内容が引き継がれなくてはならない。校長が代わる度に大きく教育方針が変わるのではなく、その学校独自に引き継ぐものを確実に伝える工夫が必要である。毎年为学校評価を活用して整理し、普遍的なもの・流行的なもの等、当該校の教育の積み重ねでなくてはならない。

(5) 研修の在り方

ア 現場から学び、個の状況や様々な状況を判断して指導方法・内容を決定し学年団や各教師がフィー

ドバックする実際的な研修が必要であり、生きた研修が教員の真の力になる。

イ 校長の初任者研修は教育委員会が年に数回実施するもの、助言等は校長経験のない講師が担当することも多く、日々の学校運営の盲点や危機管理等に関する適切で十分な助言が難しい。現状は、校長独自の問題・課題や困難さについて先輩校長に聞いたり、校長間で横の連絡を取りながら手探りで課題解決に取り組んだりしている。今後は退職校長等を活用し、管理・運営に関わる様々な校長の初任・経験者研修を充実させる必要がある。

県や市単位の校長会は自主的で効果のある研修機関であり、教育委員会と連携を深め、その活用を図ったり、校長の初任者研修を充実させたりしており、教育委員会等とさらなる連携が必要である。

II 子どもたちから学んだこと

1 生徒指導で大切なこと

現在も多くの中学校で秩序が乱れたり授業が成立しなかったりする状況があるばかりか、校内暴力等の記事が新聞に掲載され、誰もが心を痛めている。

指導の基本は、その学校が自分の頭で自分らしく考え実践することである。安易に他に頼むのではなく、自分で考え実践している過程で初めて外部の様々な機関と連携することができる考える。

①生徒から学ぶ

昭和 56 年頃から全国的にも（県内も同様）多くの中学校で学校の「荒れ」が起り、私の勤務していた中学校でも校内暴力や様々なトラブルが毎日のように発生する事態になっていた。教室では私語・立ち歩き・奇声・妨害等で授業が成立しないばかりか、校内の秩序の維持も難しく、一担任の私も（当時 30 歳代）他の教師も心身共に疲れ切っていた。市議会でも学校の荒れが大きな問題になり、文教委員の議員さんが視察に来られ、対応策として大変な状況にある中学校に生徒指導推進員の配置が決められた。配置始めの TV 取材の際、皮肉にも対教師暴力が起き、その映像が全国に TV 放映されたこともあった。

定年退職後、文書の整理をしていたところ、当時の備忘録の間から、学年会のメモが出てきた。荒れに荒れている状況の中では指導の特効薬もなく危機的な毎日であったが、私たち教師がやらなければ何も前に進まないという状況下で、学年団を中心に子どもたちを見ながら必死で考えた具体的な対応策である。

（学年団の約束事から抜粋）

○担任は根気よく親や本人と静かに話をする機会をつくる。悪いことをしたときにだけ家庭訪問をして親に言いつけるというのではなく、少しでもほめるようなことがあれば、そのことを話の糸口として生徒の心を開いて、本人、親、担任で将来に希望がもてるような話をしていく。

○授業放棄している生徒を校内巡視している教師がどうか教室に入れても、授業をしている教師が関わらないままではまた出て行く。教室に入ってもみんなと同じ授業は分からないのであれば、学力に応じた内容のことを準備してやってみる。

○授業後ぶらぶらして帰宅しない場合は簡単な課題を作って課外指導をする。

○学級で一般の生徒はどう思っているのか、このクラスにいない方がいいというような雰囲気にはならない。学級の一員、仲間であるという意識に変えていく努力をしなければならない。

○学級担任だけが関わっていくのではなく、教科を通じて話す機会をつくり、授業に行っていない教師も何かの糸口を見つけて心を開かせる努力をしようではないか。

本当に力尽きるほどの 3 年間であり、それを象徴するようにこの学年の卒業式は大雪であった。しかし、卒業が近づくにつれ、生徒も少しずつ変わり、生徒と教師の人間関係も信頼関係に変化していき、卒業式は大変感動した、3 年間で一番嬉しい素晴らしい一日であった。そこでは、同僚性も生まれ、当時の教師はもちろん、生徒との個人的なつながりが今でも続いている。

大変な状況の中で教師が子どもの実態や願いを肌で感じ、自分たちの頭で考えたことは、指導書や教育書と比べても決して遜色のない、その学校の先生にしかできない指導・支援であり、結果的に生徒に響く方策が必ず見つかるものである。

最近の風潮として子どもたちの成長過程に起きる様々な問題行動を受け入れることができず、子どもを学校から排除するという考えがあり心配される。事象によって他の機関と連携することは当然必要であり、学校の独善に陥ってはだめであるが、どのような子どもであっても教室から排除するのではなく、受け入れることが学校教育の基本だと教えてもらった。そして受け入れる教育は、必ず保護者や地域の学校に対する信頼と絆の樹立につながっていく。

②生徒自身の問題・課題であるという視点

生徒が自分たちの問題に目を向け、学級会や生徒会等を中心として校内の問題行動等をなくしていくための支援が必要である。不登校や問題行動の多い学校・学級では、あの子どもがいなければというような雰囲気が学校全体にある。社会が責任を学校や教師に転嫁するため、生徒を第一に考えるよりも教師の保身意識の強化につながり、この生徒がいなければという意識が作られ、都合の悪い生徒を大切にしない雰囲気を無意識のうちに作っており、それが子どもたちに蔓延していると言える。生徒の純真な目は確かで、教師不信の心が育ってしまう。多くの教師はどのような生徒であっても見捨てないという責任と信念をもち、保護者と協働し生徒が不安がらないよう支援していかなくてはならない。それを見た子どもたちは、自分たちの問題は自分たちで解決しようという気運を高め、主体的に行動できるようになる。集団で切磋琢磨しながら個々の成長を目指すことに大きな意義がある。

③貴重な失敗・成功経験が生きる力を育てる

子どもたちは様々な失敗や成功経験があって成長するものである。小学校低学年から完璧な子どもであることを期待されすぎる傾向がある。失敗こそ大切に扱わなければならないにも関わらず、問題行動は悪であると決めつけることは子どもの成長にとって問題である。

教師が子どもを評価する視点は、成功したか否かではなく、どのように努力したか、工夫したかであり、その視点があれば、たとえ失敗しても一連の行為の一部を認め称揚することができる。

発育途上の子どもたちには問題行動や課題が出現するのが常であり、発達段階に応じて自分自身で解決したり、教師、さらに家族等の力を借りて解決したりすることに意義がある。現在の社会的風潮は学校内に問題があるのは悪であり、すぐに解決できない教師に問題があると決めつける傾向がある。学校では、教師自身が非難されることに臆病になりすぎ、子どもたちにとって真に必要な支援ができていないのではないかと危惧する。

④カウンセリングマインドを基盤に

(1) チャンス相談

悩むのが思春期であり、それに対応する教師の存在こそ大切である。学校では生徒にアンケートを実施し、問題の芽を見つけて教育相談を定期的に行っているがそれでは見つからなかったり、生徒自ら悩みを打ち明けたりすることは少ない。教師に相談

に訪れることもあるがそれは非常に少ない。例えばいじめについて教師に相談しないことが多いのは、多くの場合、教師を信頼していないのではなく、いじめで困っていること自体を認めようしなかったり、いじめられることは恥ずかしい事象であると考えていたりするケースがあるからである。家族や教師に助けを求めるのではなく、まず、自分で解決しようとしていたり我慢したりするからである。したがって、教師がその芽を見つけることは大変重要である。

そこで、日頃の廊下等での様々な生徒との何気ない雑談の中で問題を見つけたり(チャンス相談)、子どもの言動を注意深く見てその変化に気づいたりして、改まった場ではなく、いじめの実態を引き出し、支援することが求められる。

(2) 指導のチャンス

授業や学校生活の中で軽微で細かな問題行動が起きたり、気になる言動があったりして指導しておいた方がよいと判断される場合でも、物理的・精神的余裕がなく、指導のチャンスを逃してしまうことがある。それらが度重なると、指導しなければならない状況が出現しても事象に気づかなかったり、自分の責任ではないと放置してしまったりする状況もしばしば見られるように思われる。

逆に指導がなかなか入りにくいような子どもにも指導が入るチャンスがある。その子どもをいつも気にかけていると、何かの助け舟を要求していることが見えたり、人間関係ができる場面が出現したりすることがある。多忙であっても、常に子どもを大切にすると、気にかける感性が教師には必要であり、それは必ず生徒に伝わるものである。

(3) 自尊感情を高める取組

子どもたちの学校生活に関する学校評価からの分析を見ると、「いじめ」等様々な問題行動を引き起こす要因として自尊感情の低さが課題としてあげられている。逆に自尊感情が高い生徒は当然、適応力や学校生活の満足度も高く充実した生活を送っていると言える。学校では道徳や学級活動等の授業や部活動などすべての教育活動において自尊感情を高めるような取組を行うことが大切である。よく子どもを観察し、努力している点等の具体的な場면을称揚することが大切である。また、家庭と連携し、良い点を認め評価することが重要である。

(4) チーム力は教職員力である

外部から学校を見て理解しにくいのが教師の学年団による(チーム力)協働での教育である。特に小・

中学校では同一教科内より学年団での取組が優先される場合が多い。

学校には、若い教師やベテラン教師、男性教師や女性教師等、様々な個性を持つ教師が存在している。様々な教師が存在し互いをフォローし合うことでチーム力が上がるものである。各々の教師が自分の良さを出し、自分にない点を他の教師から学び（技術を盗む）合うことで、さらに教師の技量が上がる。学校規模によるが、多くの中学校では1年生から3年生まで同じ教師が持ち上がることを原則として学年団を形成している。そこで起きる様々な生徒指導上の問題等には学級担任を中心として学年団がその指導に当たる。学級を超えるような問題や大きな問題が生じたときには、生徒指導主事や学年主任の指示の下、複数で生徒に指導したり、家庭訪問をしたりする。学年団教師全員が職員室で待機し様々な役割を果たす。また、学期始めや終わりの頃には、学年の懇親会を必ず開催している。そこで、若い教員は様々なことを学んでいる。

Ⅲ 教育行政

1 魅力ある管理職

一般的に、50歳過ぎまでに管理職試験に合格（候補として登録）しなければ管理職への道は閉ざされる仕組みになっている。教師として優秀であり、後輩への指導や学校運営に尽力していても、運悪く不合格になると意欲の減退が見られる場合もある。また、管理職に登用されても責任ばかり増え苦勞するばかりだと、管理職になりたくない意思表示する教師もしばしば見られる。校長は経験豊かな教員の学校運営への積極的参加を基に学校の活性化を考えているものである。

学年主任、指導教諭、主幹教諭、教頭、副校長、校長という組織の仕組みを、現状の埋もれた教育力や教師の再生という観点から見直す必要があるように感じている。

2 勤務評価システム

近年、学校や教師に対して成果主義をベースにした勤務評価システムが導入されている。教師や学校のミッションを明らかにしたり、学校全体でベクトルを合わせたりする意味のある取組である。これにより、全教職員が自分の仕事を見直し、再確認し、PDCAから改善を重ねて、組織として仕事をするという重要なことが校内で成されつつあり、少しずつ

ではあるが成果が上がりつつある。

反面、運用を間違えると様々な問題が出現する。学校教育は個の教師力だけでなく学年団や教科内の教師が協力することで成果が現れている。特に小・中学校ではその傾向は顕著である。しかし、この評価が個人別の給与や昇進等に反映し、微妙な人間関係に影響するならば、個人主義が強くなりチームワークが壊れる要因になると心配される。学年団というチームには、気の強い性格の先生や逆に細かな配慮ができる教師、授業の得意な教師等様々な教師が存在することが重要である。4番バッターばかりのチームが勝てないように、バントの得意な選手、盗塁の得意な選手、ホームランが打てるようなスラッガーなど様々な選手が存在することでチーム力がアップするものである。教師集団も同様である。助け合い、学年独特のハーモニーを創造することを否定するような運用はチームの足を引っ張ることにつながる。

また、教育の成果は短期的な評価に加えて中・長期的な心の成長を捉える視点が重要である。教師の主体性が失われてしまわないよう、企業や他の職種にはない学校での運用の在り方をさらに研究する必要があると思われる。

3 常勤講師・非常勤講師の増加

多くの学校では様々な理由から担任教師が教諭でまかなえず、常勤講師が学級担任をするケースが増え、それが学力の低下や学級内の子どもの秩序等に悪影響となっている場合がある。生徒数や学級数に応じた十分な教諭の教員が学校園に配当されなければならない。例えば、3月末になっても、講師の人事が決まらず、人物を見て担任決定をする余裕がない。大学を卒業したばかりの教員希望者に対して簡単な教育委員会や校長の面接だけで講師採用をしたりしている。教師は様々な経験の中で育つのであるが、このような未経験な教師が学級担任をせざるを得ない実態がある。教諭に採用されれば研修等があるが、講師の場合にはそのような制度はなく、指導力不足のまま学級担任をしている状況がしばしば見られる。指導の様々な分野において未熟なため児童や保護者から指導方法・内容について苦情も出る。また、講師は教員採用試験の勉強と日々の指導が重なり、どちらもおろそかにならざるを得ない。そのことが子どもにも悪影響を与えていると考えられる。

Ⅳ 学校を取り巻く背景

1 マスコミの影響について

市民の知る権利、報道の自由、マスコミの取材の自由等があるが、記事の内容が良くも悪くも子どもたちや保護者、さらに学校教育に大きく影響してくる。

生徒指導上の事件が起きると、その事象によるものの、年少の子どもたちであっても大人の犯罪と同等に扱おうとする傾向が最近の社会風潮にある。子どもたちは集団生活の中でときにはわがままで自己中心的な言動で級友を傷つけたり、喧嘩をしたりすることもしばしばである。その失敗経験から学ぶことが将来大きな力となるのである。いじめ行為を肯定するのではないが、成長過程にはありがちなことであり、加害・被害生徒の背景を十分考え、厳しく温かく指導されることによって、好ましい人間関係の在り方を学習していくのである。このような教育的な視点の取材が望まれる。

2 指導の効果や好ましい事象の情報公開

指導の好ましい成果について意図的に情報公開する必要がある。学校や教師の問題や不祥事等の記事ばかりが目立ち、学校で地道に取り組んでいる内容や生徒の素晴らしい取組について保護者や地域は十分知らされていない傾向が見られる。様々な学校行事の広報だけでなく、日々の学校生活において子どもたちが助け合う場面、生徒会の取組、部活動での子どもたちの努力や活躍・・・、積極的に情報公開することが今こそ必要である。

そこで、学級、学年、学校からの通信の充実が必要と考える。小学校では毎日保護者と連絡帳を交換しているが、中学校の保護者が学校の実態を知るには学校からの通信以外にない。通信の中には学校の様子や教師の教育理念がふんだんに含まれている。また、通信を出すためには子どもたちの言動についてよく観察しておかなければ書くことができない。そういう観点からも〇〇通信は大変重要である。そこで、定期的な通信の回数や学校、学年、学級の内容の分担等、学校内で十分共通理解しておく必要がある。

3 様々な学校教育観

自分の通った小・中学校時代の経験を唯一の評価基準にして今の教育の評価や批判をしている大人の発言が目につく。社会の指導的立場である方にもそのような意識からの発言を見聞きすることも多く残念である。

現在の学習指導要領や各校の教育課程、昔にはなかった新しい教育課題、複雑で多岐に渡る教育課題等

があることについて理解はなく、評価者自身が児童・生徒である時の思い出目線で学校を見ており、独善的な意見が多いことがあげられる。例えば「昔の先生は厳しかった。今頃の先生は怒らない。」「昔の学校は、いじめはなかった。」等・・・。度を超すと低次元教育論になりかねないばかりか、学校や教師の独自性・主体性が崩れ、学校の足を引っ張ることにつながっていく。

4 少年法の趣旨について

大人の犯罪と成長過程の中学生の問題行動は本質的に違うものである。何かのトラブルがあり、相手に傷害を負わせたとしても、子どもたちはそのような失敗をしながら成長していく存在である。また、少年法では、触法行為に対して、子どもを罰するという立場よりも、子どもの発達状況に合わせて扱い方を変え、子どもが真に反省するように自己を見つめさせ、周囲が手助けをすることが大切であると説いてある。しかし最近では、大人と同じ視点から事件として見る傾向があり、問題行動を起こす子どもを排除する方向が目につく。少年犯罪を大人と同じように扱い、一律に学校教育から排除する姿勢は教育には馴染まないばかりか、一般生徒である子どもの将来にも悪影響を及ぼす。また、学校内で問題傾向の強い生徒を排除するという考え方は、多くの生徒の学校に対する不信感を生むことに通じる。現在は、これらの子どもたちを取り込む教育を実践している学校ははるかに多く、健全である。

問題を起こした生徒の現在や将来をよく考えると、時には警察等の力を借りるのが必要な場合もあるが、慎重に扱わなければならない。学校は個の生徒の状況に応じた教育的な配慮の基で警察と連携している。警察の生活安全課の少年担当はそのような配慮ができていくことが多い。私たち教師にとってかけがえのない一人ひとりの子どもたちは社会の大きな財産でもある。私たちの選択が問われていると思う。

V. 終わりに

1973年から2011年3月までの38年間、微力ながら岡山県の学校教育に携わらせていただきました。その間、2度にわたり教育学部附属養護学校（教諭として3年、高等部部教頭として3年）に勤務させていただきました。そこでの個に対応した実践的な指導や研究は私の教職の基礎となったばかりか大きな財産となりました。私は倉敷市・岡山市の中学校で

の勤務が中心でしたが、その間、教育委員会事務局や小学校・幼稚園にも勤務させていただき、最後は岡山市立京山中学校校長として退職しました。様々な職場で勉強させていただき感謝しております。

教職を退くにあたり、記録に留めておかなければと思います。今の学校についてレポート作成を試みましたが、レポートは独善に陥った懸念がありますが、学校や子どもたちへの熱い思いが先行したものご理解いただければ幸いです。学問に王道がないように、教育に王道はありません。特効薬や近道はないということです。ピンチのときこそ基本に立ち返ることが重要だと強く思っております。

参考文献

- 平成 24 年度前期岡山市立野谷小学校学校評価
- 平成 23 年度 1 学期及び平成 24 年度 1 学期岡山市立石井中学校学校評価
- 平成 24 年度 1 学期学校評価の結果と分析（岡山市立京山中学校）
- 平成 23 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の

諸問題に関する調査」について（文部科学省平成 24 年 9 月 11 日）P19, 20 の「加害児童生徒に対する学校の対応」

- 「平成 23 年度岡山県学力・学習調査」結果の概要 P26 ～ 35（岡山県教育庁指導課）
- 平成 23 年度岡山市教育委員会の事務に関する点検・評価報告書（平成 24 年 9 月岡山市教育委員会）
- ベネッセ教育研究開発センター第 4 回学習基本調査報告書（中学校版 2006 ～ 2007）
- 岡山県教育委員会「教育時報 2013. 2 月」

Title:The Current Status of Education in Okayama
What Happning in the Junior High Schools,and Counter Measures.

Key Words:counter measures,okayama

Hideaki IWADOU
(former the principal`s association of junior high school in okayama)
(former the principal of kyoyuama junior high school)
